

おくらおか

(題字は初代学長 山田守英氏)

第109号

平成14年5月31日

編集 旭川医科大学
教務厚生委員会
発行 旭川医科大学教務部学生課



(写真撮影 学生課 細木和比古)

早春の十勝岳連峰 (白金)

| | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 新入生を迎えて……………久保 良彦…… 2 | 海外視察報告……………木村 昭治…… 12 |
| 医学科の新入生を迎えて……………谷本 光穂…… 3 | 海外教育視察旅行報告…谷本、稲葉、澤田、初見…… 13 |
| 看護学科の新入生を迎えて……………良村 貞子…… 4 | 授業評価の公表にあたって……………片桐 一…… 14 |
| 平成14年度医学科入学者名簿…………… 5 | 授業評価…………… 14 |
| 平成14年度看護学科入学者名簿…………… 6 | 新歓合宿を終えて…………… 26 |
| 平成14年度看護学科第3年次編入学者名簿…………… 6 | 大学祭のお知らせ…………… 26 |
| 新入生を迎えて……………池田 紀子…… 7 | 学生団体一覧…………… 27 |
| 新入生を迎えて……………角張 伸之…… 7 | 研究室紹介…………… 28 |
| 旭川医科大学に入学して……………小針 隆志…… 8 | 新入生研修実施される…………… 29 |
| 旭川医科大学に入学して……………長谷部拓夢…… 8 | 平成13年度 学位記授与式…………… 29 |
| 旭川医科大学に入学して……………榎谷美津穂…… 9 | 平成14年度 入学式…………… 29 |
| 旭川医科大学に入学して……………山下 萌…… 9 | 表紙写真の募集…………… 30 |
| 外国人留学生一覧…………… 10 | 教官の異動…………… 30 |
| 平成14年度 大学院入学者名簿…………… 10 | 窓外…………… 30 |
| 海外視察報告書……………中村 正雄…… 11 | |



新入生を迎えて

— Think globally, act locally —

旭川医科大学長 久保良彦

本年度本学に入學された、医学科第1学年95名、看護学科第1学年60名、同じく看護学科第3学年編入者10名の皆さん、おめでとうございます。

病に悩む患者を救う医療従事者になろう、あるいは病気の制圧のため研究者を目指すという高い志をもって、苛酷で、しかも求められることの多い医師や看護師の道を自ら選び、かつ選ばれた皆さんに本学教職員一同は心からの敬意と祝意をもって歓迎申し上げます。

皆さんがこれから学ぶ医学は日進月歩、前世紀より引続いて目覚ましい研究の発展を遂げており、21世紀は医学・医療の爆発的ともいえる進歩がその特長となるだろうとさえいわれます。もちろん、それは基盤となっている分子あるいは細胞生物学の目を瞠るばかりの展開に支えられているものであることはいまでもありません。

そしてそれらの基礎的研究の発展は、臓器移植、生殖技術、遺伝子診断や治療あるいは再生医療といったさまざまな高度先進医療の開発に繋がり、さらにはオーダーメイドの医療の夢を抱かせるものです。

いいかえますと、医学は不確実性の科学といわれてきた“元”となっている患者—人間のもつ多様性が、ゲノム解析の進歩により個人々々がいかに違うかという分子レベルの差として明らかにされる期待がもてるようになってきているのです。

しかし、このような高度な先進医療が開発され、医療の現場に逐次持ち込まれる場合、常に生命倫理の問題がかかわってきます。そしてそのような開発が進み、いままで踏み込んだことのない領域が次々と開かれて、われわれ人間が自身で適切に判断できるかどうかという深い倫理問題が生じてくる可能性すら心配されます。

さらに、最近とくに注目されてきた医療過誤の問題があります。“To err is human”といわれますが、この問題も医療の高度化と決して無縁ではありません。

このように医学・医療が進む程、医療従事者にはそれにふさわしい知識・技術を身に付けることはもちろんですが、より深く広く“人間”を知ることが

求められることとなります。これから医学・看護学を学ぶ皆さんは基本となる知識・技能の学習はもちろんですが、さらに人間理解への努力、人間の精神的、身体的な多様性を是非学んでいただきたいと思います。

他方、医学・医療の目覚ましい進歩・発展は医療技術の革新と相俟って、それらに伴う桁外れの情報量の増大をもたらしております。ちなみにその増加は30年前に比べると、現在約800倍になっているともいわれます。このような情報量の増大とそのスピードに対処するために加え、医学教育における体験学習を一層重視する方向で、本学では数年前より全面的なカリキュラム改革に取り組んでおります。

多くを学ばせるという従来の教授法に比べ、学生が主体的に自ら学ぶ、いいかえると自分で課題を見出し、自分でそれを解決する力を身につけさせ、体験学習を多く取り入れる方が近年の医学の発達に則したよりよい医学教育法であることが分かってきたからです。このカリキュラムを効果的なものにするためには、学生それぞれが良い医師・看護師になるという明確な自覚をもち、自ら学ぶ努力をすることが何より大切な条件となります。昔から“よく学び、よく遊ぶ”ということばが大学学生生活のモットーのように広く持囃されてきました。しかし、いまの医学の学び舎には、不適切と思われれます。良い医師・看護師になるために“よく学び、よく学ぶ”べきであります。

本学に入學された皆さんはよくご承知のことと思いますが、本学はその教育理念の冒頭に「医療の質を向上させ、地域医療問題を解決することにより社会に貢献する」ことを掲げ、建学の精神を再確認しております。“Think globally, act locally”という言葉がありますが、国際的に通用するレベルの仕事をして地域に貢献することと解釈することができます。

新しい世紀の地域医療を担う皆さんがこのことをモットーに本学で大いに知識と技能を研鑽し、人間性の陶冶に努められることを期待して止みません。

平成14年5月7日



医学科の新入生を迎えて

医学科第1学年担当 谷本光穂

新入生の皆さんご入学おめでとうございます。苦しい受験期間を終え、無事難関を突破し、今は人生晴れ晴れといったところでしょう。さて、大学というのは、今までの高校生活とはずいぶん違ったところ。全て自己責任において行動しなければなりません。それだけ自由ということでしょう。初めて親元を離れ、夢にまで見た一人暮らしの生活を楽しむ人もいるでしょう。大学では、まず知的好奇心を示すことがなにより大切です。そして、その好奇心に対し積極的に探求することが大切です。そのためには知的好奇心をもつ感性を大切にしなければなりません。どうぞいろいろな授業を受けて自分から積極的に問題を見つけ、解決する努力をしてください。このことは、特に医学の分野では、学問の発展は目を見張るものがあり、限られた講義時間内では到底カバーできません。要点のみを講義し、後は自己学習に期待するほかありません。将来、君たちが医師として一人立ちしたとき、もう誰も教えてはくれません。自己学習が必要になり、これは生涯続けなければなりません。学生時代に、このように問題を見つけ自ら解決するという習慣を身に付けておくことが大切です。そのためには、基本、基礎をしっかりと理解しておくことが肝心です。

次に、本学の学内では土足禁止になっていることです。これは、本学開学以来の規則ですが、最近の学生諸君にはどうもよく理解されていないようです。先輩たちからの様々な情報が入ってくるでしょう。それを基に真似することはあまり感心できません。10年ひと昔といわれ、新しい状況が具体化されるには10年は要すると言われますが、現在では3年ひと昔といつてよいほど変化が激しい時代です。インターネットや携帯電話の発達を見ても良く分かります。教育についても、例外にもれず実に変化が激しいのです。小、中学校では完全週5日制がスタートし、高校でも来年度から中学校で3割削減された内容が

盛り込まれるなど「ゆとり教育」が浸透してきています。本学のカリキュラムも、3年前から劇的に変化し、今年から新たなカリキュラムが実施されているのです。先輩たちの経験した情報はほとんど役に立たなくなっています。大学の先生方や事務の方々には皆、上靴で学内を歩いているのに、先輩を含めて学生だけが土足で歩いている姿は大変見苦しく、また、恥ずかしいと思わなければなりません。また、最近の臨床医学では、知識、技能、技術ばかりではなく、患者や地域住民とのコミュニケーションの重視が指摘されています。しかし、最近、コミュニケーションの苦手な若者が増えているようです。コミュニケーションをうまくとる訓練には、まずは、クラブ活動に積極的に参加するなどして多くの友人を作ることでしょう。

入学式当日実施された新入生ガイダンスでもお話ししましたが、今年の休日つまり、「自由の日」は年間、実に186日もあります。約半年です。土曜、日曜、祝祭日、そして夏休み、冬休み、春休み、これらの日々をどのように過ごすかは皆さんの自由ですが、ぜひ有意義に過ごしていただきたいと思います。

また、「朝食」に関しては、某医科大学で医師国家試験不合格の学生に朝食欠食者が多いことから調査したところ、在学中の全教科の平均点や成績順位も、朝食を摂っているグループに比べ、欠食グループは明らかに劣るという結果が得られたそうです。是非、朝食をしっかりと摂って健康を維持して、楽しい学園生活を送ってください。

いろいろ学生諸君には注文を付けましたが、この旭川医科大学に入学した俊秀なる学生諸君は、これらの注文に十分な理解を示してくれるものと信じております。

青春真っ只中の君たち、2度と経験できない貴重な「青春」を十分謳歌してください。

(物理学 教授)



看護学科の新生を迎えて

看護学科第1学年担当 良村貞子

新生の皆さん、ご入学おめでとうございます。これからの大学生活に、多くの夢と希望をもって入学された皆さんをお迎えでき、とてもうれしく思います。その夢や希望の実現に向け、少しでもお役に立つことができればと考えています。

さて、4月から始まった新生活はいかがですか？ 厳しい受験生活からの開放感を満喫されましたか？ 大学生活へのギア・チェンジはうまく行ったでしょうか？ 友人作りは順調でしょうか？

個性あふれる皆さんに期待することは、多くの人との出会いの中での成長です。今まで、友人は同世代が多かったと思いますが、この大学の4年間では、様々な年代の人々と出会います。例えば、看護学科は第1学年の時から実習が始まります。専門的な学習がまだ十分でない皆さんにとって、最初の5日間の実習は、さぞ緊張の日々となると思います。しかし、病気を持つ人が病院という制約の多い場所で、どのように生活しているか、看護職者はどのような援助をしているか、を知りまた、多くの医療従事者の連携によって医療が提供されていることを実感できると思います。この学習は、その後の勉学の基礎となる重要なものです。

確かに初対面の人となかなか話ができない学生には、実習に行くこと自体が大きなストレスとなることでしょう。でも、皆さんのこの経験は実り多いものです。皆さんが患者さんのことを真剣に考えて実習していることは、必ず伝わるのです。ただし、必要な会話や援助ができない自分を責め、自分にだけ関心が向いているようでは、患者さんは学生を迷惑に思うだけです。このように、看護学科では、今までの机上の学習とは異なり、体験を通して学習していくことが求められます。したがって、まず自分の健康管理をする必要があります。体調が悪いとよい実習はできません。風邪をひきにくい身体づくりのために、大いに運動をしましょう。また、気分転換ができる

趣味を持つこともよいでしょう。

ところで、今年の入学生には、本学のアドミッション・ポリシーである、地域社会への関心を持ち、自らが問題を見つけ解決する意欲と行動力を持つ学生として選ばれた、AO入試の最初の学生もいます。彼女らは、合格後、ボランティア活動を通して多くの学びをしています。今まで出会う機会のなかった人々から得たこの多くの学びを、是非、他の学生と共有して、さらに成長してほしいと期待しています。

また、皆さんには、常に現実と向かい合う勇気をもってほしいと思います。現実には、時には厳しいものです。でも、自分には何ができ、何ができないのか、を明確にすることから始めましょう。自分の考えを素直に相手に伝え、相手の反応を素直に受けとめる。このことは、日々の生活の中で培うことができます。もし、自分で解決できない問題が発生した場合は、SOSを早めに発信しましょう。ただし、努力しないで発信するSOSは誰も受けとめてくれません。努力したができない場合には、必ず誰かが受けとめてくれます。遠慮は不要です。

最後に、「深呼吸」をお勧めします。若い時はエネルギーがあふれていますので、走りすぎることが少なくありません。時には、スピードをゆるめ、深呼吸してみましょう。すると、周囲の状況が目に入ってくるかもしれません。深呼吸は自分の考えをまとめるよい時間ともなるでしょう。新鮮な空気は、心を清らかなものにしてくれます。

走る・歩くスピードには個人差がありますが、時々スピードをゆるめ、ゆっくり周囲をながめ、また、自分らしいスピードに戻してみてもいいかもしれません。この大学には、頼りになる先輩や教職員が沢山います。何か困ったことがありましたら、躊躇しないで誰かに相談しましょう。自分の声を出すことを忘れず、有意義な学生生活を過ごされることを祈っています。

(看護学講座 教授)





新入生を迎えて

医学科第6学年 池田紀子



新入生のみなさん、入学おめでとう。

これから始まる新しい生活に希望と期待で胸を膨らませていることでしょう。

そこで、最上級生の先輩としてちょっとアドバイスしたいと思う。

学生生活は長いようであつという間に終わってしまう。あつという間に歳もとってしまう。だから、ぼーっと過ごすなんてもったいないことはしないで時間を有意義に使ってほしいと思う。学生であり、若さがある、時間のある今だからこそできることに果敢に挑戦して、たくさんのことを体験してほしい。時間の使いかたは人それぞれだと思うけど、私の場合は年に1回海外旅行することになっている。行き当たりばったりの冒険みたいなピンポ旅行。一番強烈だったのは、アフリカ旅行中の出来事。

サファリに行く途中に車がひっくりかえり、傷を負った。かなりビビったけど、事故のおおわびにと超豪華なホテルに泊まれることになり、超デラックスなサファリコースにかわった。ラッキー！！体を張って得た贅沢は最高だった。

グアテマラでは1ヶ月間、ホームステイをしながらスペイン学校に通った。学校には北欧の人が多く、もちろん日本人は全くいなかった。週末は学校の友達と色々な観光地に行っておもした。富士山より高い山にも登った。雲を見下ろした頂上からの景色を今でも鮮やかに思い出せる。

私にとって旅は発見の連続だ。

いろんな文化に触れて見るものすべてが新鮮だったり、旅先で出会った人の親切に感動したり、大自然の中で人生観が変わったり、自分のやりたいものが見えてきたり・・・。

そして何よりも、どこでも生きていけるたくましさを手に入れた。

年に3回の長期休暇は学生の特権。みなさんはどんな経験をするのか。たくさんいい経験をして自分に磨きをかけて、ステキな医療人になって下さい。

新入生を迎えて

看護学科第4学年 角張伸之



新入生の皆さん、入学おめでとうございます。新しい環境、友人、一人暮らし等、大学生活にはもう慣れたでしょうか。看護学科の皆さんはこれから4年間この大学で学んでいくわけですが、この4年間というのは思いのほか早く過ぎて行きます。皆さんにはこの大学、または学外においてより多くの事をより楽しく学んでほしいと思います。

「大学生活は全てが学びの場」とよく言われますが、確かにその通りだと思います。講義やテスト、実習等の勉強はもちろん、部活動やバイト、学外の人との交流等、様々な場面が自分の知識、人格の成長の機会となります。しかし、ここで重要なのは自分で学ぶ意志の有無です。最初のうちはその場に立つだけで学ぶ事も多いと思いますが、慣れてくるとそれだけでは意味がなくなります。与えられた事をするのではなく、自分で考え、自分

で行動するという事が非常に大切になり、また求められます。その人の自主性に任せられた大学生活ですので、あくまで自分を伸ばすのは自分という事を忘れず、それぞれの目標に向かって頑張ってください。

また大学生活では一般教養や専門的な知識、技術を身につける事は当然重要ですが、それと同様に人格の幅を広げる事も大切な事だと思います。旭川医大には様々な経歴や人生経験を持った方が多くいるので、その方々と交流する事や、趣味、部活動に打ち込む事、外部との交流等、自分の人格、考え方の幅を広げる方法はいくらでもあります。何にせよ新しい事や、今までの自分に無かったものに否定的にならず、まずは挑戦してみる事、受け入れてみる事が大切だと思います。そして、その中で自分というものを徐々に確立していければいいのではないかと思います。

4年間の大学生活では苦しい時や、深く悩む瞬間が必ずあります。しかし、それ以上に楽しい事も必ずあります。それを探せるかどうかは自分次第です。せつかくの大学生活なので皆さんにとって学ぶ事の多い、充実した、楽しい4年間になることを期待しています。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 小針 隆 志



受験のときに、私は初めて旭川に来た。旭川空港に着いたとき雪が降っていて、辺りは真っ白であった。試験会場に向かうときに、道の端にかなり厚く雪が積もっていたので驚いた。私は面接のときに、ものすごく緊張してしまった。試験はあまりできたような気がしなかったのもうここに来ることもないだろうなあ、と思い、疲れ、そして落ちこみながら家に帰った。合格発表のとき私はなかなか封筒の中身を見ることができず、5分くらい固まっていた。だから自分の番号を見つけたときに「うおおおあったあああ！！」と思わず叫んでしまった。まさかまたここに来ることができるとは思わなかった。私は旭川医科大学に入学することができて本当にうれしく思っている。

授業も始まり、初日に医学チュートリアルとい

うものを行った。これは7人くらいのグループに分けられていて、課題を与えられてその中から皆で問題点を見つけ出し、これについて各自が自分自身で調べ、次回に発表して討論するというものだ。教師が一方的に講義をするのではないのでこのような授業は今までやったことのない新しいものだった。チュートリアルは楽だと言う先輩方も多かったが、自分としてはこれはかなり難しいと思った。まず、どこまで調べればいいのか分からない。そして、調べてきたことを自分の中で理解して、それを自分の言葉にして再構成して、相手に分かりやすいように説明するのがなかなかできないと思った。また、自分が何か言っているときも、チューターはただ黙って見ているだけなので、自分の言っていることが合っていないような気がしてきて不安になった。

今年から新新カリキュラムになり、前よりも厳しくなったという話を聞いた。これから授業の方はさらに大変になっていくと思うが、無事に卒業して立派な医者になれるように全力で頑張りたいと思う。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 長谷部 拓 夢



念願の旭川医科大学に晴れて入学することができて、僕は今大きな期待と同時に、少しの不安を感じている。

高校と異なり、大学には幅広い年齢層の人達が全国各地から集まっている事に驚かされる。そうしたクラスの仲間や先輩達と上手くやっけていけるだろうかとか、ちゃんと勉強についていけるだろうかといった漠然とした不安はある。だが、それ以上に「これから6年間、一生懸命努力して良い医師になるぞ！」という気持ちの方が僕の中では強い。

入学するなり僕は幾つかのサークルに入った。今までスキーも合唱も部活動としてやったことなどなかった。ラグビーに至っては、高校生の弟がラグビーに熱中しているのを見ては、なんと汚い野蛮なスポーツだろうかと思っていたものである。

その私が、朝5時から伊の沢で滑って、昼に歌って、夕方グラウンドでマシーンを押しているのだから驚きだ。何故ラグビー部なのかと考えてみると、入学式の日突然拉致されて胴上げの洗礼を浴びせられたことがどうも大きいように思う。先輩達の雰囲気がとても明るく、初めてラグビーというスポーツをする僕に対しても皆優しく接してくれる。少しくらい怪我をしようが、とても楽しく練習できるし、早く上手になりたいとも思う。そのように感じるようになった自分自身の変化に驚くと同時に、その変化をととても嬉しく思う。

入学してから日が浅いので、まだそれほど多くの授業を受けてはいない。これからどのような内容の授業が始まるのかよく分からないが、とにかく自分なりに頑張りたいと思っている。「一生懸命努力して良い医師になる」という初心を忘れずにこれからの学生生活を送りたい。

ところで、私は健全な未成年者である。飲み会に行っても、決して誘惑には負けない。誰がなんと言おうと負けない。しかし翌日二日酔いなのは何故だろうか……。謎である。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 榎谷 美津穂



4月5日の入学式を終え、大学生活も半月が過ぎようとしている。宿泊研修も無事に終え、日に日に友人も増え、高校時代とはまた違う楽しさを感じている毎日である。

私の中に在った「医大生はおとなしい」というイメージは、入学式の朝、大学構内に足を踏み入れた瞬間に消え去った。熱心な部活動の勧誘に、私はア然としたが、どこかほっとした気持ちになった。そして、これからの大学生活に胸を弾ませたのである。しかし、8日から早速行われた講義を受け、胸を弾ませてばかりではいけない事に気づかされた。講義内容は、「看護とは何か」というものであり、看護師を目指す私達にとっては、永遠のテーマでもあるものだ。突

然「あなたの考える看護とは何か」という質問を問われ、私は正直戸惑ってしまった。今まで、「なぜ看護師を目指しているのか」と、自分に問いかけたことは幾度もあり、自分なりの答えは出ていたが、「看護とは何か」という問いに、明確な答えが出たことは無かったからだ。現時点では、看護とは、患者の精神的支えになること、また、医療施設などで患者が安心できる雰囲気や環境をつくることである、というようにただ漠然としているが、これからの4年間でしっかりとその問いを見つめ、考えていきたいと思う。

これからの4年間は、私の人生の中で最後の学生生活となるであろう。部活動や日々の生活を通して、多くの仲間と知り合い、その仲間達と充実した生活を送っていききたいと思う。その中で、また新たな自分を見つけ、自分自身を磨いていききたいとも思う。常に、医療従事者になりたいという気持ちを忘れず、自分自身を向上していこうと思っている。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 山下 萌



入学式から2週間がすぎましたが、大学生活にも何とか慣れてきました。入学したばかりの頃は新しい土地で一人暮らしをする事や、友達ができるのだろうかなどの様々な不安がありました。しかし、新入生歓迎合宿ですぐに友達ができ、一人暮らしをしている人がたくさんいたので、自分一人が大変な思いをしているわけではないのだと感じました。

大学生活を送っていく中で実感した事は、“何事も自分自身でやらなくてはいけない”という事です。

よく、大学は自分で勉強していく場であると言われるのでこれは当たり前なのかもしれませんが、高校時代は何か少しでも問題が発生すると先生を頼りにしていたので難しい事だなと思います。また、

自分の意見を発表する時もきちんと相手に伝える事が必要とされ、やはりたくさんの方の言葉を身につけて言いたい事を言える様にならなくてはいけないと思いました。この様に、何事も自分自身でやる事は大変ですが、自分の好きな事を勉強しているという点に関してはとてもやりがいを感じられます。特に、基礎看護技術学では、“看護とは何か？”“健康であるという事はどういう事か？”などの看護に関する具体的な問題について勉強しており、以前自分が持っていた看護のイメージとは大きく異なりましたが、看護の新しい一面を学ぶ事ができてます。

そして、高校時代にやる事ができなかった部活動を始める事ができました。何か新しい物から始める事は大変ですが、上達する為に努力をし続ける事によって自分が成長できると思うので、頑張っていきたいです。

毎日、講義や部活で忙しい日々を送っていますが、忙しさに流されずに、入学時に持っていた緊張感を持ち続けてしっかり頑張っていきたいです。

外国人留学生一覧

平成14年4月1日現在の本学在籍の外国人留学生は、大学院学生11名、学部学生2名の合計13名です。

日本に興味を持って、学問と共に友好の使節でもあります。出会ったときには、挨拶を交わして、友好を深めてください。

(学生課)

| 氏名 | 通称 | 性別 | 国籍 | 種別 | 期間 | 所属 |
|--|------|----|-------|---------------|------------------------|---------|
| PAN,BOCHEN (潘伯臣) パン ボーチェン | パン | 男 | 中国 | 大学院博士 第4学年 | 1999.4.1～ 2003.3.31 | 細胞・器官系 |
| GAO,BIHU (高弼虎) ガオ ビフー | ガオ | 男 | 中国 | 大学院博士 第4学年 | 1999.4.1～ 2003.3.31 | 生体情報調節系 |
| XIN,FENG (辛 夙) シン フツン | シン | 男 | 中国 | 大学院博士 第4学年 | 1999.4.1～ 2003.3.31 | 生体情報調節系 |
| BALJINNYAM,ERDENECHIMEG バルジンニヤム、エルデネチメグ | エルデネ | 女 | モンゴル | 大学院博士 第3学年 | 2000.4.1～ 2004.3.31 | 生体情報調節系 |
| ZHAO,YAWEI (趙亚薇) チャウ ヤーウェイ | チャウ | 女 | 中国 | 大学院博士 第2学年 | 2001.4.1～ 2005.3.31 | 細胞・器官系 |
| ZHAO,CHUNLEI (趙春雷) チャウ シュンライ | チャウ | 男 | 中国 | 大学院博士 第2学年 | 2001.4.1～ 2005.3.31 | 細胞・器官系 |
| WANG,GUOLI (王国丽) ワン グオリ | ワン | 女 | 中国 | 大学院博士 第1学年 | 2002.4.1～ 2006.3.31 | 細胞・器官系 |
| MAMUTI,WURAMU (馬木提 吾拉木) マムティ ウラム | ウラム | 男 | 中国 | 大学院博士 第1学年 | 2002.4.1～ 2006.3.31 | 生体防御機構系 |
| SATO,MARCELLO OTAKE サトウ マルセロ オオタケ | マルセロ | 男 | ブラジル | 大学院博士 第1学年 | 2002.4.1～ 2006.3.31 | 生体防御機構系 |
| XIAO,NING (肖 寧) シャオ ニン | シャオ | 男 | 中国 | 大学院博士 第1学年 | 2002.4.1～ 2006.3.31 | 生体防御機構系 |
| GAO,YUQIN (高玉琴) コー ユーチン | コー | 女 | 中国 | 大学院修士 第1学年 | 2002.4.1～ 2006.3.31 | 看護管理学 |
| HAIRUL ANUAR BIN AMIR ハイルル アヌアル アミル | ハイルル | 男 | マレーシア | 医学科 第4学年 | 1998.4.1～ 2005.3.31 | |
| KHALILATI BARIZAH ハリラティー バリザー | エラー | 女 | マレーシア | 医学科 第4学年 | 1999.4.1～ 2005.3.31 | |

平成14年度 大学院入学者名簿

平成14年度博士課程入学者名簿

| 氏名 | 専攻 | 指導教官 |
|--------|---------|--------|
| 山本 雅大 | 細胞・器官系 | 小川 勝洋 |
| 伊藤 崇 | 生体情報調節系 | 菊池 健次郎 |
| 高橋 賢治 | 生体情報調節系 | 牧野 勲 |
| 石川 千里 | 生体情報調節系 | 高後 裕 |
| 神保 絢子 | 細胞・器官系 | 高後 裕 |
| 井上 充貴 | 生体情報調節系 | 高後 裕 |
| 澤向 光子 | 生体防御機構系 | 高後 裕 |
| 岡本 耕太郎 | 細胞・器官系 | 高後 裕 |
| 藤根 美穂 | 生体情報調節系 | 藤枝 憲二 |
| 清水 紀之 | 生体情報調節系 | 笹嶋 唯博 |
| 小関 隆 | 細胞・器官系 | 葛西 眞一 |
| 中村 聡喜 | 生体情報調節系 | 松野 丈夫 |
| 岸部 麻里 | 細胞・器官系 | 飯塚 一 |
| 北原 克教 | 細胞・器官系 | 八竹 直明 |
| 長門 利純 | 生体防御機構系 | 原 潤保 |

平成14年度博士課程入学者名簿

| 氏名 | 専攻 | 指導教官 |
|---------|---------|------|
| 大蔵 暁正 | 生体情報調節系 | 岩崎 寛 |
| 玉 国 麗 | 細胞・器官系 | 鈴木 裕 |
| 馬木提 吾拉木 | 生体防御機構系 | 伊藤 亮 |
| 肖 寧 | 生体防御機構系 | 伊藤 亮 |

平成14年度修士課程入学者名簿

| 氏名 | 専門分野 | 指導教官 |
|--------|-------|-------|
| 石川 徳子 | 母子看護学 | 岡田 洋子 |
| 澤田 みどり | 看護管理学 | 良村 貞子 |
| 舟根 妃都美 | 看護管理学 | 良村 貞子 |
| 細野 恵子 | 母子看護学 | 岡田 洋子 |
| 三宅 美恵子 | 母子看護学 | 野村 紀子 |
| 高 玉 琴 | 看護管理学 | 良村 貞子 |

海外視察報告書

化学教授 中村正雄

海外の医学及び教育制度や医療サービス等の調査のため、平成14年2月10日から2月16日まで、イギリスとフランスを訪問した。参加メンバーは中村正雄（一般教育）、関口公男(会計課)、外川恵子(看護師長)、新開淑子(看護学科)であった。参加メンバーの構成が平成13年の暮れに決定し、急遽訪問先をロンドンの聖トーマス病院とナイチンゲール・ミュージアム及びパリのロスチャイルド病院と選定した。

1) 聖トーマス病院とナイチンゲール・ミュージアム (写真1)

聖トーマス病院にはフローレンス・ナイチンゲールの理想が生かされた“ナイチンゲール病棟”が現存している。病棟を一つの共同体とするこの考え方は時代と共に個室、小人数部屋の重視へと向かったが、現在病棟建築家の間で再評価されている。聖トーマス病院はここに組織的看護教育を行う看護師訓練学校が設立された事でも名高い。併設されたナイチンゲール・ミュージアムで彼女の業績と共に看護師訓練学校の設立理念をしのぶ事ができる。ミュージアムは少数の専門家と複数のボランティアで運営されている。遠来の私たちに対するボランティアの親切な配慮を印象に残しロンドンを去った。



写真1

2) ロスチャイルド病院

ロスチャイルド財団が運営するこの病院は、脳動脈瘤の患者に新しい治療法を積極的に行っている。ここには本学の櫻井寿朗氏が私費留学され技術を研鑽されている。おかげで私たちはCT画像を見ながら実際の治療が行われる現場を見学できた(写真2)。治療現場には医療材料の専門家が加わり、医師と相談しながら治療に適した材料を選定していた。医療チームはスタッフの他韓国、南米の方が加わっている。主宰するJacques Moret教授の基本姿勢は、必要とされる治療技術を広く医療従事者に提供する事である。訪問した病院は頭頸部と眼科の専門病院で、経営面に寄与のある分野に多額の投資がされている

まとめ。 今回の最大の収穫は本学の分野を越えた方々と面識を持たったことである。この試みが定着し、多くの参加者が本学を様々な視点で見直す事になれば本学の大きな財産になるであろう。パリの訪問先の選定は田中教授(脳神経外科学)に助力いただいた。お礼を申し上げます。



写真2

海外視察報告

看護学教授 木村 昭 治

第2グループ(山内(数学)、木村(看護)、佐藤、樋口(事務官))はロンドン大学、ローマ大学を訪問したが、ここでは紙面の都合上最初に訪れたロンドン大学での交歓について記すことにする。ロンドン大学は典型的なカレッジ集合型の総合大学であるがカレッジの数はロンドン市内に多数に及ぶ。我々は本大学衛生学講座松井講師が同大学に留学中であることを幸いに、仲介をお願いした所クィーンメアリー医科歯科大学の教務担当副学長のコーペルマン教授を紹介していただいた。Eメールでの打ち合わせでは昼食をしながらインフォーマルな話し合いをということだったので、皆で大学のゲスト用のレストランで豪華な食事をしながらディスカッションと内心期待しながら出かけたのだった(因みにこの大学は著者が20年近く前に留学しており、教授専用のレストランのあることを知っている)。予想に反し、案内された部屋はコーペルマン教授の部屋でテーブルにはサンドイッチとジュースが置いてあった。コーペルマン教授、その補佐をしている解剖学教授、渉外・広報局長の3人がいた。英国における医学教育事情全般について話を伺いたいと打診してあったので、まずその説明を受けてから、疑問があれば適宜こちらから質問するという消極的な形を予想していたのだが、いきなり「あなた方が知りたいのは何なのか」と聞かれ、準備の出来ていない頭を整理し、急いで英作文用の頭に切り換え以下の点についてお聞きした。1.入学者選抜の方法 2.カリキュラム 3.教養科目 4.パラメディカル学生との合同講義 5.インターン制

1.では、いわゆる学力に関してはAレベルをクリアしていることが必要条件でこれに面接を加えて判断する。面接は3回行われるようで、2回は大学関係者の面接官で、1回は大学関係者以外の

面接官で行いそれらの総合で判定するという。外部の意見を反映させるシステムには少々驚いた。

カリキュラムは完全に臓器別になっており5学年を通じて(英国は5年制)正常・異常をセットにして学ぶ。コアカリキュラムとして臓器別に到達目標を細かく記した冊子が学生に渡されている。高学年ではベットのサイド中心であり、これは日本と変わらない。チュートリアル制度も低学年で行うがそのテーマは医療分野に限らず、従ってチューターは誰でもよいらしい。看護師でも良いし極端な話秘書でも良い。全般的な問題解決能力を養うのが目的であるからというのがその理由であり、チューターはファシリテーターとして積極的に関与する方向にある。チュートリアルは学生には好評であるがチューターには評判が悪いようでやはり時間をとられるのがいやらしい。

教養科目に関しては詳しく聞けなかったが、基本的に正規の科目として入っていないようである。

パラメディカルとの合同会議も試みたようであるが医学科との要求水準が違うため内容設定が難しく、現在は行っていないとのことだった。

インターンは6年目がそれに相当し義務化されている。

以上、記憶にある部分を簡単に記したが、彼らも問題点をかかえており日々試行錯誤をかさねているのであってこの点は我々と何ら変わることがないという印象を受けた。

コアカリキュラムや臓器別のカリキュラム進行、チュートリアル制度など旭川医大が目指しているものと重なっている部分も随分と多い。

最後に今回の訪問を快く受け入れてくれたコーペルマン教授を初めとするクィーンメアリー医科歯科大学関係者に謝意を表す。



海外教育視察旅行報告

谷本光穂物理学教授、稲葉久子副看護部長
澤田みどり看護師長、初見定俊会計課長

我々のグループは、米国での教育視察を仰せつかった。我々は看護教育、環境科学教育の現状を調べる目的で、2月8日から2月15日の日程でシカゴ、ニューヨークを訪問した。同時多発テロ事件で米国は嚴重な警備体制をとっており、又、ちょうどその時期はソルトレイク・オリンピックと重なり、特に空港でのチェックには閉口した。そのためか、シカゴへ到着早々初見課長は高価な皮製コートを紛失するという事態に遭遇した。

看護教育としては、本学附属病院看護部出身の小林瞳さんを尋ねてシカゴへ、また、環境問題と取り組んでいる研究所のあるニューヨークへ出かけた。2月8日まずシカゴに飛んだ。そこから、5大湖の1つヒューロン湖の近くにあるサギナまで飛び、サギナ・ヴァレー大学の看護学部大学院学生である小林瞳さんを訪問し、主に大学院の教育制度について説明を受け、学内を案内してもらった。次に、ニューヨーク州の州都オルバニーに飛び、ニューヨーク州立大学オルバニー校附属の環境科学研究センターを訪ねた。この研究所との連絡にはDr. Blanchardに頼んだ。オルバニーでの2泊は、Blanchard氏の同僚のDr. Kumai宅に初見、谷本が、Dr. Kumaiのお嬢さん宅に澤田、稲葉がそれぞれお世話になった。研究所では副所長のDr. Lalaが精力的に研究所の内部と研究内容について案内・説明をして下さった。学生、研究員は大学の宿舍生活をしており、そのためか研究は非常に活性化されていた。宿舍は大学の建物と一体になっていて、教育・研究の体制としてはすばらしい環境であった（谷本・初見）。

私達は、1996年まで旭川医科大学附属病院に勤務後、渡米し看護師ライセンスを取得、現在ミシガン州立サギナ・ヴァレー大学・大学院に学ぶ「小林瞳さん」を訪ねました。サギナ・ヴァレー大学は、

1963年開校の総合大学で、メンテナンスも行き届き、障害者にも不自由のない学習環境を提供しています。看護学部の理念は「臨床において、即戦力となる技（skill）と理論（theory）を備えた看護師の育成」を掲げ、その評価基準はかなり高いようです。更に、修士課程の学生は臨床経験者であり、しっかりした学習課題を持ち学んでいます。大学側は、学生のハイレベルの学習ニーズに応えるべく、幅広い見識と能力を持った教授陣を揃え、インターネットを利用した遠隔公開講義、メールミーティング等、教育環境の充実を図っています。米国看護教育の一端ではありますが、高学歴化の日本からみると、「何のために教育するのか」、「向上とは何か」を考えさせられた訪問となりました（稲葉、澤田）。

最後に研究所訪問に際しては公式の依頼状が必要になった。しかし、本学には公式の依頼状はなくその作成に苦勞した。また、帰国後、礼状を出す際に公式の礼状はなく個人的に処理した。贈り物として写真たてを大学として準備してもらった。本学でも、公式の依頼状や礼状を準備しておく必要があるのではないかと痛感した。この海外教育視察旅行の機会を与えてくださった久保良彦学長はじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。



授業評価の公表にあたって

副学長 片 桐 一

医学教育改革が急速にすすめられています。それは、社会が求める優れた医療人、そして世界のどこにあっても活躍出来る医療人を育成しようとするものです。加えて、医学、医療技術の進歩に呼応して、生涯にわたり新しい知識、技術を吸収し得るような学習態度を身につけさせることを目指しています。

昨年3月に全ての医学生が履修すべき必須の学習内容が「医学・歯学教育の在り方に関する調査研究協力者会議」でまとめられ、本年3月には看護教育に関する基本方針が「看護教育の在り方に関する検討会」でまとめられ、これらの内容にそった教育が14年度入学者から始まります。

本学でも、「新カリキュラム」、「新々カリキュラム」とカリキュラム改革を行って授業内容改善に努力しておりますが、学生の側も独自に授業アンケートを行うなど、授業改善への切実な願いを抱いていると思われます。授業を担当する側の教員と授業を履修する側の学生が、その教育内容、授業内容の充実について双方向的に意志疎通を図ることの必要性を示していると言えるでしょう。

昨年度後期から、大別して次の2つの方法で「学生による授業評価」を行うことにしました。

授業評価：従来の授業評価と教官評価を総合的に合わせたもので、主に授業担当教官を評価する。評価結果は各授業担当教官にフィードバックし、各教官が授業の中で自己評価を行う。

科目評価：統合科目、実習、演習に対して行うもので、主に授業構成を評価する。

コーディネーター（授業責任者）にフィードバックし、担当教官間の意見を取りまとめて、コーディネーターが自己評価を行う。この自己評価と学生評価をあわせて「かぐらおか」に公表する。

このたび昨年度後期に行った「科目評価」の結果をこの「かぐらおか」に公表することとなりました。

これからも実施されます「学生による授業評価」が授業改善に有効に活用されますことを願っています。

科目全体の講義企画に対する学生評価

- 問1 あなた自身の出席状況について、お答えください。
- 問2 あなたは、授業の前後に、授業を理解するための努力（予習・復習等）をしましたか。
- 問3 あなたは、授業中に、授業の内容を理解するように努めましたか。
- 問4 科目全体の履修の目的は、あらかじめ明確にされましたか。
- 問5 履修主題間で、内容の重複は避けられていましたか。
- 問6 各履修主題に割り当てられた授業時間数は適切でしたか。
- 問7 担当教官は、履修主題に沿って授業を行いましたか。
- 問8 各履修主題の難易度は、ほぼ同じ程度でしたか。
- 問9 科目全体の内容は、理解しやすいものでしたか。
- 問10 科目全体の内容は、今後の学習意欲を増すものでしたか。
- 問11 科目全体の履修の目的は、最終的に達成されましたか。
- 問12 試験、提出物（レポート等）の量と内容は適切でしたか。
- 問13 この科目全体の講義企画に対してのあなたの総合評価を示してください。

科目名：総合生命科学Ⅲ（医学科第1学年後期）

履修者数：95 配付数：95 回収数：95 回収率：100%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 3.8 | 2.4 | 3.4 | 4.0 | 3.9 | 3.3 | 4.1 | 3.3 | 3.1 | 3.3 | 3.6 | 3.5 | 3.6 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

総合生命科学Ⅲコーディネーター 中村正雄

総合生命科学Ⅲは化学から生命科学の物質的基礎、生化学の序論まで内容が多岐に及んでいます。このことが問6、8、9で高い評価を得られていない原因になっていると思います。また、「準備教育モデル・コア・カリキュラム」で履修内容に導入が求められている化学平衡、化学結合論、熱力学といった項目に十分な時間が割けないのが実状です。平成14年度カリキュラムでは、総合生命科学Ⅲは新たに生命科学Ⅳとして模様替えし、時間数が30から45コマに増加します。従ってテーマに沿ったより丁寧な講義が可能になり、問6、9で指摘された主題に割り当てられた時間数の不適切さや理解のしにくさは克服できると思います。また、生化学に関係される教官の方々とは講義内容の重複を避ける努力を重ねており、目標とする無駄のない理解しやすい講義に近づけると思います。

科目名：総合生命科学Ⅳ（医学科第1学年後期）

履修者数：95 配付数：95 回収数：93 回収率：97.9%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 4.1 | 2.7 | 3.8 | 4.2 | 3.9 | 2.9 | 4.2 | 3.6 | 3.6 | 3.7 | 3.7 | 3.1 | 3.8 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

総合生命科学Ⅳコーディネーター 渡部 剛

本科目では、人体を構成する諸器官の組織構築を理解することを目的として、人体組織学および病理学序論の講義を行っている。今回の評価では、講義時間数に関する問6で2.9という平均以下の点数が付いた他は、おおむね3.5点以上の評点をいただいた。問6に関しては、受講学生からのコメントで「学ぶべき内容の量に対して講義時間が少なく大変であった。」という意見が多く寄せられたが、現行のカリキュラムの理念から考えて、残念ながら足りない分は自学自習で補っていただくしか方法はない。もちろん、自学自習の過程で質問・疑問が生じた場合には、気軽に担当教官まで尋ねに来て欲しい。その意味では、むしろこの科目が終了した時点から、組織学・病理学に関する皆さんの本当の勉強が始まるといっても過言ではなく、学ぶ意欲に満ちあふれた学生に対しては、この科目の展開時期以外でも積極的に支援していきたいと考えている。

科目名：総合生命科学V (医学科第1学年後期)

履修者数：95 配付数：96 回収数：96 回収率：100%

*評価結果 (平均)

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 4.0 | 2.8 | 3.5 | 3.3 | 3.2 | 3.0 | 3.6 | 2.9 | 2.7 | 2.9 | 3.4 | 3.4 | 3.2 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

総合生命科学Vコーディネーター 谷本光穂

医療機器による生体計測の原理について物理学、数学などの基礎科学の知識を用いて理解し、更に画像の測定原理や医療統計の基礎を学ぶといったかなり無理をした統合科目であったし、このように非常に学習範囲が広く、特に前半の内容については、物理学の基礎が出来ていない学生にはかなりハードルの高いものになるであろうことは当初より予想されていた。評価結果の平均が3.0以下の問は問2、問8、問9に現れているが、まさに予想通りの結果であった。学生諸君のこの評価を真摯に受け止め、新しいカリキュラムでは十分考慮し、改善を施した。つまり、この授業科目は3つに分け、生命科学II(物理学、数学分野)、同III(統計学、情報処理分野)、同XI(骨学、画像診断学基礎分野)をそれぞれ開講し、講義科目の目的を明確にした。

科目名：総合臨床医学I (医学科第3学年後期)

履修者数：99 配付数：94 回収数：92 回収率：97.9%

*評価結果 (平均)

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 4.3 | 2.9 | 3.7 | 2.9 | 3.1 | 2.4 | 2.7 | 2.8 | 2.9 | 2.9 | 2.9 | 2.6 | 2.8 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

総合臨床医学Iコーディネーター 藤枝憲二

総合臨床医学Iは生殖、発達、感染をテーマに排卵障害、周産期異常、出生前診断、小児の細菌・ウイルス感染症、尿路感染症、感染症治療、白血病・悪性リンパ腫などを主な履修内容として産婦人科、小児科、泌尿器科、薬理学、第三内科の各講座が担当した。このコースに対する学生自身の自分に対する評価では出席状況もよく、授業を積極的に理解しようとするなど学習意欲はうかがえた(ただかなり学生自身には甘い評価のように思えるが)。しかし科目構成、内容に関しては満足のいくものではなかったようである。特に各履修主題に割り当てられた時間数、内容への不満が多い。もともとこのコースは他のコースに比べて関連性にやや欠けるテーマの集合であったことによると思われるが、教官側もこれまでと異なった講義構成であったためコース全体を考えての講義は難しかったのかもしれない。ただ今までなかったこうした学生からの授業評価はよい試みであり、教官にとっても授業改善の一助になると思われるし、今後本当の意味で統合科目の内容になるようにする必要がある。評価した学生への要望として新カリキュラムの理念は、学生が自主的に学習し、講義の不足分は学生自らが補うことにあるので、このことを認識しこれから先努力してもらいたい。

科目名：総合臨床医学Ⅱ（医学科第3学年後期）

履修者数：99 配付数：89 回収数：85 回収率：95.5%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 4.4 | 3.3 | 3.8 | 3.6 | 3.1 | 2.8 | 3.4 | 3.0 | 3.2 | 3.5 | 3.2 | 3.1 | 3.4 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

総合臨床医学Ⅱコーディネーター 笹嶋唯博

今回の総合臨床医学では学生の大部分が講義への新鮮な集中心と向学心を実感したが、一方教官側は、これまでの形式の変更が求められたことから準備不足となり、科によっては学生から厳しい評価が相次いだ。講義の理解しやすさをたかめるため系統だった内容要約と整合性は総合講義の必須条件となる。しかし臨床講座各科の特性から講義の準備に費やし得る時間が制限され、担当科間の内容の整合をはかることは無論、科内での調整も十分行えなかったのが現状であった。さりとて今後、短時間の講義に求められるポイントの要約と明確さを高める努力が必要である。講義を担当する教官数が多くなると相互の調整が一層難しくなるのでどの様に調整するか検討を要する。いくつかの問題点が明らかになり、改善点は尽きないが少なくとも今後発展させるべき講義形態との実感が得られたと考える。

科目名：総合臨床医学Ⅲ（医学科第3学年後期）

履修者数：99 配付数：98 回収数：92 回収率：93.9%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 4.3 | 3.3 | 3.8 | 3.4 | 3.2 | 3.0 | 3.3 | 3.2 | 3.3 | 3.4 | 3.2 | 3.0 | 3.3 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

総合臨床医学Ⅲコーディネーター 葛西真一

総合臨床医学Ⅲは消化器病を主体として、一部貧血が加わったコースだが、これに対する総合評価点は5段階の『3』ということで、普通であった。細かく見ると、学生自身に対する自己評価は平均『4』に近く、科目構成と内容、および試験内容に対する評価はすべて平均『3』であった。ちなみに試験の結果は平均点が78点（2内：70、3内：65、2外：95）であった。他のコースの結果と比較してみなければわからないが、本コースの出来は可もなく不可もなくといったところだったようだ。まだ学生個々の意見を自由記載欄で見ると、14名が記載しており、血液学がこのコースに含まれることへの疑問のほかは、消化器に関して内科、外科系のつながりが理解しやすかったとする意見が多かった。方法的には授業で配られたプリントが好評であった。ほかには休講や試験の扱いに関する疑問が若干あったが、特筆すべきは、このアンケート調査自体が差し障りのない内容でインパクトに欠けるとした指摘である。これらの意見を尊重し、講座の枠を取り外したはずの新カリキュラムがあいかわらず各科の寄せ集めにすぎないものにならぬように、今後もコース内でのすり合わせが課題と思われた。

科目名：人間科学Ⅱ（看護学科第1学年後期）

履修者数：61 配付数：61 回収数：61 回収率：100%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 4.2 | 2.2 | 3.4 | 3.1 | 3.4 | 3.5 | 3.5 | 3.5 | 3.3 | 3.3 | 3.3 | 3.4 | 3.5 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

人間科学Ⅱコーディネーター 松岡悦子

これまでは「やって終わり」でなんとか15回逃げ切っていた授業に対して、何十もの厳しい声が返ってくるというのは、正直ショックである。でもこの厳しさが、これからの競争社会の不可欠の要素なのだと、現実を直視させられている。

これまでほとんど聞かれることなかった学生の声に目が向けられるようになったのは、当然のなりゆきだろう。授業の受け手である学生たちの求めるものを提供するのがこれからの大学だとするならば、教員は学生のニーズにもっと敏感になっていこう。とくに、学生との年齢差が毎年1才づつ離れていくことを考えると、彼らの頭の中にあることをこちらが勝手に推しはかることはできない。互いの頭の中にあることをフィードバックし合う必要があるだろう。教員の私としては、これらの評価をもとにより良い授業のための教材収集、教育方法の研修機会などにもっと時間とお金をかけたいと思っている。

科目名：健康教育論（看護学科第1学年後期）

履修者数：61 配付数：61 回収数：61 回収率：100%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 4.1 | 2.3 | 3.1 | 3.3 | 2.8 | 3.2 | 3.5 | 3.4 | 2.7 | 2.9 | 3.0 | 3.3 | 3.1 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

健康教育論コーディネーター 望月吉勝

この科目では、健康教育に関する様々な概念・モデル・方法について、広く浅く知り、看護学の各領域で活用するための準備とすることを目標としています。問9と問10の評価が3未満と低く、また授業が分からない、おぼえるべきことが多くて大変との自由記載がありました。演習用シートを考案するなど理解を助ける工夫をしてきましたが、学習すべき範囲・程度をより明確にしたいと思います。問5の評価が3未満と低く、また内容の重複との自由記載がありました。一般論と看護での事例とを分担したわけで、単なる重複ではありません。他の項目については3以上の評価を得ており、また教育手法についての体験的学習とグループで教材づくりに取り組んだことがよかったとの自由記載がありました。今後も自ら学ぶことを支援するよう努力したいと思います。なお、他の授業での課題提出と重なって辛かったとの記載がありましたので、課題提出時期については配慮したいと思います。

科目名：疾病論（看護学科第2学年後期）

履修者数：56 配付数：56 回収数：56 回収率：100%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 4.3 | 2.8 | 3.9 | 3.3 | 3.0 | 2.3 | 3.6 | 2.5 | 2.9 | 3.6 | 3.0 | 2.4 | 3.1 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

疾病論コーディネーター 木村昭治

大変きびしい評価ではありますが、個々のコメントには参考になる意見が多く今後の授業にそれらを生かしていきたいと考えています。少なくとも、具体的な到達目標を明らかにしておくべきだったと反省しています。

疾病論は守備範囲が広く、講師の数も多数に及びます。講師間で熱意や内容に差があるのは否めませんが、全領域をカバーする適当な教科書もないことから教える側にも多少のとまどいがあったかも知れません。国試を参考に到達レベルを設定し各領域の先生方に理解していただく方針です。

演習企画に対する学生評価

- 問1 演習用の配付資料を読む等も含め、演習前の予習は十分でしたか。
- 問2 演習に積極的に参加したと思いますか。
- 問3 演習への取り組みは学習目標への到達を目指す態度として適切なものでしたか。
- 問4 履修要項に記載されている履修の目的は達成されましたか。
- 問5 事前に演習目標と概要の説明がなされていましたか。
- 問6 演習はスケジュールに沿って予定どおり行われていましたか。
- 問7 学生数に対し、指導教官数は適切でしたか。
- 問8 演習を展開する上で適切な能力を備えた人材が配置されていましたか。
- 問9 指導教官間の連携は機能していましたか。
- 問10 演習内容はこれまでの講義内容と関連づけて理解しやすいものでしたか。
- 問11 事前に配布された資料は、実技を行う上で役立つ内容でしたか。
- 問12 演習によって課題の要点を理解し、基礎的な技術を習得できましたか。
- 問13 演習内容の難易度は適切でしたか。
- 問14 演習によって臨地看護学実習に出る意欲がわきましたか。
- 問15 演習用の設備、機材、用具等は必要十分な性能と量でしたか。
- 問16 演習中の安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。
- 問17 学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
- 問18 この演習は価値のある内容と思われましたか。

科目名：生活援助論Ⅰ（看護学科第1学年後期）

履修者数：61 配付数：61 回収数：61 回収率：100%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 3.5 | 4.3 | 4.1 | 3.5 | 4.2 | 4.0 | 3.6 | 3.8 | 3.1 | 3.9 | 4.1 | 3.7 | 3.7 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| 3.3 | 3.1 | 3.8 | 3.1 | 4.1 | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

生活援助論Ⅰコーディネーター 阿部典子

生活援助論Ⅰは、看護学科第1学年が演習により主に日常生活に関する基本的な看護技術を学習する科目である。

今回の授業評価の結果から、学生は意欲的に演習に取り組み、演習内容を価値あるものとしてとらえていることが明らかになった。

平成13年度は、一部演習に用いる機材・用具の整備が充分ではなかった。次年度は事前に十分な点検・整備を行う必要がある。それとともに、演習内容や方法に合わせて機材・用具をさらに充実させていきたい。

看護技術の演習は同時に複数の教官が担当しており、今後も教官相互のさらなる連携を図っていく必要がある。また、学生が自分の意見を表出しやすく、より主体的な学習活動ができる環境をつくっていききたい。学生個々が看護技術の実践力を養い、臨地看護学実習に対する学生の意欲がたかまる授業にしていききたいと思う。

科目名：成人看護学Ⅰ（看護学科第2学年後期）

履修者数：56 配付数：56 回収数：56 回収率：100%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 2.6 | 2.7 | 2.8 | 2.5 | 2.5 | 2.0 | 2.5 | 2.4 | 2.1 | 2.4 | 2.3 | 2.2 | 2.7 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| 2.3 | 2.5 | 2.5 | 2.3 | 2.3 | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

成人看護学Ⅰコーディネーター 前田 隆

相当厳しい結果が出ることは予測していましたが、この数値は評価結果として真摯に受け止める必要があると思います。ここで何か書くと「言い訳」と捉えられてしまうことが懸念されますが、あえてコメントさせていただきます。

成人看護学の守備範囲は非常に広く（標準的な教科書で十数冊分）、単位数、時間数とも相当数必要となります。ところが、カリキュラム編成上スリム化が求められ、演習コマによる授業展開を強いられる結果となっています。

13年度は講義で展開しましたが、評価は演習で受けています。今回の調査は授業の企画に対する評価であり、成人看護学全体の授業構成を理解して頂いた上での回答かやや疑問を感じています。広範囲にわたる展開内容ですので系統立てて理解しにくかったと思っています。

14年度は、経緯はともかく、不合理を是正するため、いくらかの問題が発生する事を予測しつつも、講義、演習はカリキュラム通りの展開を考えています。

科目名：生活援助論Ⅱ（看護学科第2学年後期）

履修者数：66 配付数：66 回収数：66 回収率：100%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 3.2 | 3.7 | 3.6 | 3.2 | 3.3 | 3.7 | 2.8 | 3.0 | 2.6 | 2.9 | 2.6 | 3.0 | 3.2 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| 2.8 | 3.4 | 3.5 | 3.4 | 3.0 | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

生活援助論Ⅱコーディネーター 北村 久美子

本科目の目的は、地域における各ライフサイクル・さまざまな健康状態にある人々を対象にした日常生活援助技術を学ぶことにあります。

5名の科目担当教官は、それぞれの専門領域を担当し総合的な授業を展開しております。

この度の学生からの評価は、今後、授業を展開するうえで大変参考になりました。学生の生活援助能力および実習へのモチベーションが高められるよう授業の工夫をする必要性を痛感しております。評価の結果は、今後の授業目標や指導内容、指導方法の改善に役立たせてゆきたいと思っています。さらに、授業を有効に成立させるため、きめの細かい指導案を作成（plan）し実施（do）、検証（see）するなどの努力をしてゆきたいと思います。

実習企画に対する学生評価

- 問1 実習用の配付資料を読む等も含め、実習前の予習は十分でしたか。
- 問2 実習に積極的に参加したと思いますか。
- 問3 実習への取り組みは学習目標へ到達するための態度として適切なものでしたか。
- 問4 履修要項に記載されている履修の目的は達成されましたか。
- 問5 事前に実習目標の説明がなされていましたか。
- 問6 実習はスケジュールに沿って予定どおり行われていましたか。
- 問7 学生数に対し、指導教官数は適切でしたか。
- 問8 実習を展開する上で適切な能力を備えた人材が配置されていましたか。
- 問9 指導教官間の連携（実習中の支援等）は機能していましたか。
- 問10 実習全体の内容は関連する講義科目の内容と対応がとれていましたか。
- 問11 実習内容の難易度は適切でしたか。
- 問12 準備された説明書・実習書は実習内容を把握するのに役立ちましたか。
- 問13 今後の学習への興味を増す内容でしたか。
- 問14 実習用の設備、機材、用具等は必要十分な性能と量でしたか。
- 問15 実習中の安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。
- 問16 学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
- 問17 各項目は実習として行う価値のある内容と思われましたか。

科目名：総合生命科学実習Ⅱ（医学科第1学年後期）

履修者数：95 配付数：95 回収数：95 回収率：100%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 2.4 | 3.6 | 3.3 | 3.2 | 2.6 | 2.2 | 2.7 | 3.3 | 2.7 | 2.7 | 3.2 | 3.4 | 3.5 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| 3.4 | 3.3 | 3.6 | 3.6 | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

総合生命科学実習Ⅱコーディネーター 松野 丈夫

骨学の知識の重要性を認識してもらうために臨床医の我々がこの実習を担当することになり3年が過ぎた。今年から解剖の渡部教授の御協力をいただいて最初に全般的なお話をさせていただいた。

学生評価が特に不良であった点について記載すると

1. 実習前の予習が不十分であった。
2. 実習目標の説明が十分になされていない。
3. 実習はスケジュールにそって行われていない。
4. 教官数が不足している。
5. 教官間の連帯が機能していない。
6. 関連する講義内容と対応がとれていない。

1、3に関しては例年のことながら講義の順番がカリキュラムと異なり変更されることが多く、この場合前もって講義内容を通知しておく必要があるだろう。

5に関しては教官がそれぞれのpart別に分けて教えたため複数の医師が関わることになり実習の進行や方法に統一性を欠いたせいと思われる。

この他前もって講義をしてほしいとか教官がいい加減などかなり厳しい評価をいただいたが改善点を模索することでもう少し実益のある実習になると思う。

科目名：総合生命科学実習Ⅲ（医学科第1学年後期）

履修者数：95 配付数：95 回収数：84 回収率：88.4%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 2.8 | 4.1 | 3.8 | 3.7 | 3.9 | 4.0 | 3.4 | 4.2 | 3.8 | 4.3 | 3.3 | 3.7 | 3.4 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| 3.8 | 4.0 | 3.6 | 3.8 | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

総合生命科学実習Ⅲコーディネーター 渡部 剛

本実習では、正常の人体組織の構築を理解することを目的として、正常組織標本の顕微鏡観察および代表的な病理像の示説・解説を行っている。今回の評価では、おおむね3.5点以上の評点をいただき、その有効性に関してある程度の評価は得られたと考えている。ただ、受講学生からは、「実習時間に対して観察すべき標本の数が多くスケッチするのが大変であった。」という意見が多く寄せられた。組織学実習に際しては、今後の学習に必要と思われる組織標本を厳選したつもりだったが、本年度の学生には負担が重かったようであり反省している。そこで、来年度からは現実の実習時間に合わせて必要最低限の課題を設定し直し、提出を求めるスケッチの枚数を各回1~2枚程度に軽減する予定である。ただし、系統的に正常組織標本を観察する機会はこの実習だけであるため、今後も向学心のある学生に対しては水曜日の午後などの空き時間に実習室を開放し、自学自習の機会を提供していきたい。

科目名：総合生命科学実習Ⅳ（医学科第1学年後期）

履修者数：95 配付数：95 回収数：95 回収率：100%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 2.9 | 3.8 | 3.7 | 3.5 | 3.3 | 3.7 | 3.3 | 3.7 | 3.4 | 3.2 | 3.3 | 3.8 | 3.6 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| 3.5 | 3.8 | 3.6 | 3.6 | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

総合生命科学実習Ⅳコーディネーター 谷本光穂

本科目は、脳解剖、物理学、統計情報処理の3分野の実習からなっている。この奇妙な3分野の統合であるから、我々教官側もそうであるが、学生諸君は相当戸惑ったと思われる。しかし、評価結果は、問1を除けば3.2～3.8で概ね良い評価が得られた。

さて、自由記載の欄にある主なものを挙げる。①物理の実習は面白いものもあってよかった。脳は意味も分からず位置を覚えるだけでつまらなかった。②脳解については、もっと詳しく知るために講義の時間を作って欲しかった。③物理実習は良かったけれど、骨学実習は適当で教官の熱意はほとんど感じられなかった。骨学はもっと改善すべきだ。④物理・情報処理はよかったものの、脳解剖は、脳の構造もろくに知らないのに、いきなり、CT、MRIを見せられた。これにはほとんど意味がないのではないか？

これらの学生の感想は、新しいカリキュラムでは、生命科学実習Ⅱ（物理学分野）、同Ⅷ（形態学、骨学、画像診断基礎分野）に分けられ、改善されることと思われる。問1についての物理学実習では、実習テキストをホームページに掲載し、予習できるように改善すべく現在作業中である。

科目名：解剖学実習（医学科第2学年後期）

履修者数：98 配付数：96 回収数：92 回収率：95.8%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 3.9 | 4.3 | 4.1 | 3.9 | 3.9 | 4.1 | 3.3 | 3.8 | 3.9 | 4.1 | 4.0 | 4.1 | 4.3 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| 4.2 | 4.0 | 4.1 | 4.5 | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

解剖学実習コーディネーター 吉田成孝

2001年度は解剖学第1講座へ吉田の着任により、新たな実習プログラムを作成した。主な変更点は中枢神経の実習時間を拡充し、実習に対する講義は最小限にとどめ、各自の自主性に基づく実習としたことである。この結果、時間が足りないと感じた、また、ポイントを絞りきれなかった学生もいた。その他の問題点は、実習が進む中で様々な問題点を修正したため、進捗が予定と異なった部分があったこと、解剖学第1講座は教官が2人でやや指導が手薄になった面があった。さらに、総合生命科学Ⅳおよび総合生命科学実習Ⅰの履修後半年が経過しているため連携が十分でなかったこともあげられる。学生評価は全体としては概ね良かったと考えるが、実習計画の中にやや評価が低い項目があったことは先に挙げた点によるものとする。2002年度の実習はスタッフも増え、また、組織学との連携をより取り入れ、ポイントを絞り込んだものにする予定である。

科目名：人間科学実習（看護学科第1学年後期）

履修者数：61 配付数：60 回収数：60 回収率：100%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 3.3 | 4.4 | 4.0 | 3.6 | 3.6 | 3.9 | 3.6 | 3.9 | 3.7 | 3.7 | 3.4 | 4.0 | 3.7 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| 3.9 | 4.0 | 3.9 | 4.0 | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

人間科学実習コーディネーター 林 要喜知

「本実習への取り組みは概ね熱心かつ積極的である」と答えた学生が多かった。出席率、レポート提出状況、あるいは、実習態度などを考慮した担当教官側の評価も、この点に関しては、ほぼ一致している。実習計画や指導体制に対して相当数の学生は、学習意欲を高める指導が多く、実習環境も適切であると感じていた。それゆえ、充実した実習であったといえよう。ただ、「目標設定や指導体制の一層の充実を要望する」あるいは「実習内容が難解なものがある」とする意見も若干あった。今後に向けた改善点としては、開講時期について見直しする必要がある。他の実習科目と開講時期が重なっており、レポート作成などに時間的余裕がないと感じた学生が多かったからである。また、本実習は、生物学系、化学系、及び物理学系から構成されているため、学生評価については、各系ごとに実施することが望ましいと思われる。

科目名：生体観察実習（看護学科第1学年後期）

履修者数：61 配付数：57 回収数：57 回収率：100%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 3.1 | 4.2 | 4.0 | 3.5 | 3.2 | 4.2 | 3.9 | 3.9 | 3.3 | 3.4 | 3.4 | 3.6 | 3.9 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| 3.3 | 3.7 | 3.2 | 4.0 | | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

生体観察実習コーディネーター 岩元 純

授業と実習の整合性が、カリキュラムのスケジュール上はややうまくいっていないのではないかと危惧していたが、やはり学生から指摘されていた。この点は、授業のスケジュールを調整することで改善してゆきたい。各項目3点以上だったので、まずは及第点をいただいたわけであるが、レポート作成での苦情があり、他教科の実習との調整も今後の課題であると思われた。実習の難易度が3.4、興味深かったかどうかについて3.9だったので、実習に携わった先生方の努力が適正に評価されたことに安堵を覚えた。

臨地看護学実習企画に対する学生評価

- 問1 実習用の配付資料を読む等も含め、実習前の予習は十分でしたか。
 問2 実習に積極的に参加したと思いますか。
 問3 実習への取り組みは学習目標への到達を目指す態度として適切なものでしたか。
 問4 履修要項に記載されている履修の目的は達成されましたか。
 問5 事前に実習目標と概要の説明がなされていましたか。
 問6 実習はスケジュールに沿って予定どおり行われていましたか。
 問7 学生数に対し、指導教官数と実習指導者数は適切でしたか。
 問8 指導教官と実習指導者の連携はとれていましたか。
 問9 これまでの学習内容を活用して実習を展開することができましたか。
 問10 受け持ちの患者の看護の難易度（コミュニケーションも含めて）は、適切でしたか。
 問11 看護過程について、指導教官や実習指導者から明確な助言が得られましたか。
 問12 看護技術を実践する機会が多く与えられましたか。
 問13 カンファレンスにおいて、看護に関する明確な討議がなされましたか。
 問14 実習記録・レポート等の量は適切でしたか。
 問15 実習場の設備、機材、用具、物品等は必要十分な質と量でしたか。
 問16 実習中の安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。
 問17 学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
 問18 実習は看護の専門性に対する関心や意欲を高めましたか。

科目名：科目名：基礎看護学実習（看護学科第1学年後期）

履修者数：61 配付数：56 回収数：56 回収率：100%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 4.0 | 4.5 | 4.3 | 3.9 | 4.4 | 4.5 | 3.8 | 3.1 | 3.6 | 4.1 | 4.1 | 3.0 | 3.9 |

| | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 |
| 2.3 | 3.7 | 3.7 | 3.4 | 4.3 |

*評価に対するコメント

基礎看護学実習コーディネーター 良村貞子

看護学科第1学年の最初の実習である。実習は、病棟実習4日間及び関連分野の見学実習（病院、薬剤部、検査部、放射線部、外来）5日間である。学生は自己評価の通り、概ね積極的に実習に取り組んでいた。今後の課題として、実習指導教官が病棟の実習指導者とより密な連携を図り、患者のニーズに合わせ、基本的看護技術をより積極的に提供する場面作りを行なう必要がある。また、実習記録・レポートの量が多すぎるという評価は謙虚に受け止め、改善する必要がある。

しかし、8割以上の学生が、看護の専門性に対する関心や意欲を高めることができたことと答えたことは、学生自身の努力と教官の指導がよく協働した結果とみることができる。

なお、第1学年は、水曜日と金曜日を選択科目が開講されているため、5日間の連続した実習が展開できない。専門的学習が始まったばかりの学生にとっては、日々変化する患者の状態の把握は困難である。今後、更なる実習内容の検討及び改善が求められている。

科目名：看護過程論実習（看護学科第2学年後期）

履修者数：56 配付数：53 回収数：50 回収率：94.3%

*評価結果（平均）

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 問11 | 問12 | 問13 |
| 4.3 | 4.7 | 4.5 | 4.0 | 4.2 | 3.9 | 3.7 | 4.0 | 3.7 | 3.9 | 4.4 | 4.0 | 3.8 |
| 問14 | 問15 | 問16 | 問17 | 問18 | | | | | | | | |
| 3.6 | 4.1 | 4.3 | 4.0 | 4.7 | | | | | | | | |

*評価に対するコメント

看護過程論実習コーディネーター 良村貞子

看護学科第2学年の5日間の実習である。実習場所は、本学の附属病院と旭川赤十字病院の2施設の病棟であり、学生が半数ずつ配置される。実習に対する満足度は高く、多くの学生が看護の専門性に対する関心や意欲を高めることができたことと答えた。これは、自己評価にみられるように、学生自身が積極的に実習に参加したこと、指導教官や病棟の実習指導者から明確な助言を得てのびのび実習できた成果とみることができる。また、第1学年の時より、看護技術を実践する機会が多かったことも、満足度を高めた要因であろう。

今後、改善すべきことは、自由記載で指摘されたように、5日間は短すぎる、講義と実習が連動していないとされた点である。この点は、カリキュラム全体の検討の中で早急に対応すべき問題である。また、実習が12月のため、実習場所への交通機関に関連する問題が指摘された。更なる実習内容の検討を行なっていきたい。

新歓合宿を終えて

新入生歓迎実行委員会委員長 民谷健太郎

4月6日7日に新入生歓迎実行委員会最大のイベント、新歓合宿が行われました。

この合宿のいちばんの目的は新入生同士の親睦です。入学したばかりの新入生の不安や緊張を和らげることができたのであれば幸いです。何人かの一年生に合宿の感想を聞いたところ、なかなか良い反応でした。

合宿の内容として、まず校内で部活動の紹介や学校見学を行いました。続いて時屋亭に移動し歓迎会、部活動乱入など新入生と上級生との交流も大成功に終わることができました。

合宿全体として、計画段階で大きなトラブルが無かったことが成功に大きく影響しています。また、本番もタイムスケジュール通りに進行できました。新歓委員（二年生）同士の結束が強まったということも非常に良かったと思います。

最後に、今回の合宿に協力してくれた、合宿係をはじめとする医学科・看護科のみなさん、お世話になった学生課の方々、時屋亭の方々にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

大学祭のお知らせ

大学祭実行委員会委員長 藤谷好弘

大学祭実行委員会が発足して数ヶ月、4年生のみならず、多くの学生の協力により、より充実した医大祭にするために一致団結して準備を進めています。

昨年の医大祭の成功をうけ、今年度もたくさんの市民の方に来て頂き、学生と一緒に楽しみを共有できる祭りにしたいと考えています。また、医大は普段、一般の人々との交流も少なく、イメージが偏りがちではないかと思っていました。そこで『みんな、医大に行こう!』をテーマとし、「休日にとちょっと遊びに出かける」感覚で気軽に足を運んで頂けるよう、雰囲気作りも心掛けています。

さて、医大祭の内容ですが、『スケボーキング』のライブやゲーム大会、フリーマーケットなどでみんな一緒に楽しみ、『柳田邦男』さんによる講演会や医学展などで医学に触れて頂きたいと考えています。また模擬店や花火大会で学祭を盛り上げていこうと思います。どうぞご期待下さい。

最後に、私達をご支援して下さる大学関係者の方々、快く協力して下さる地域の皆様方に深く感謝の意を表し、実行委員長の挨拶にかえさせていただきます。

学生団体一覧

平成14年度承認された学位団体は以下のとおりです。

【体育系】

(平成14年4月現在)

| 団体名 | 会員数 | 責任者 | | 顧問教官 | 備考 | 団体名 | 会員数 | 責任者 | | 顧問教官 | 備考 |
|---------------------------|-----|-----|-------|-------|----|-------------------|------|-----|-------|-------|----|
| | | 学年 | 氏名 | | | | | 学年 | 氏名 | | |
| 1 ラグビー部 | 32 | 医5 | 和田 励 | 原渕 保明 | 継続 | 23 女子バスケットボール部 | 19 | 看4 | 野口 亜実 | 千葉 茂 | 継続 |
| 2 準硬式野球部 | 34 | 医5 | 森 大輔 | 吉田 晃敏 | " | 24 ソフトボール同好会 | 18 | 医2 | 田端 秀敏 | 近藤 均 | " |
| 3 卓球部 | 35 | 医5 | 吉田陽一郎 | 谷口 成実 | " | 25 マラソンクラブ | 6 | 医6 | 渡邊 浩司 | 飯塚 一 | " |
| 4 陸上競技部 | 20 | 医5 | 白濱 武人 | 鈴木 裕 | " | 26 女子バレーボール部 | 24 | 医4 | 鷺見明希子 | 谷本 光徳 | " |
| 5 競技スキー部 | 48 | 医5 | 渡辺 成樹 | 小川 勝洋 | " | 27 アイスホッケー部 | 24 | 医4 | 石居 信人 | 松野 丈夫 | " |
| 6 ゴルフ部 | 35 | 医5 | 奥田 良 | 紀野 修一 | " | 28 男子ハンドボール部 | 22 | 医5 | 阿部 暢彦 | 上口勇次郎 | " |
| 7 硬式庭球部 | 37 | 医5 | 新保 大輔 | 田中 達也 | " | 29 乗馬クラブ | 14 | 医5 | 金尾 忠 | 金子 茂男 | " |
| 8 バドミントン部 | 50 | 医4 | 濱野 貴通 | 川村祐一郎 | " | 30 R.F.S.C(釣り同好会) | 7 | 医4 | 櫻木万治郎 | 山内 一也 | " |
| 9 男子バスケットボール部 | 23 | 医5 | 八戸 大輔 | 千葉 茂 | " | 31 カヌー部 | 11 | 医4 | 古川 健太 | 宮本 和俊 | " |
| 10 空手道部 | 17 | 医4 | 柳清 洋佑 | 相沢 仁志 | " | 32 女子ハンドボール部 | 16 | 医3 | 原 由佳 | 上口勇次郎 | " |
| 11 柔道部 | 5 | 医5 | 山内 直人 | 原渕 保明 | " | 33 ビクニック同好会 | 17 | 医2 | 熊田 有紀 | 近藤 均 | " |
| 12 サッカー部 | 37 | 医4 | 川内 宏仁 | 菊池健次郎 | " | 34 トライアスロン部 | 5 | 医5 | 白石 学 | 本間 龍也 | " |
| 13 男子バレーボール部 | 19 | 医4 | 今西 俊介 | 東 信良 | " | 35 インラインホッケー部 | 26 | 医4 | 石居 信人 | 松野 丈夫 | " |
| 14 剣道部 | 24 | 医3 | 永井 美子 | 福澤 純 | " | 36 スキューバダイビング部 | 15 | 医4 | 梅澤 耕学 | 林 要喜知 | " |
| 15 山岳部 | 16 | 医5 | 増田 竜大 | 佐藤 啓介 | " | 37 草野球同好会 | 46 | 医4 | 吉光 雅志 | 林 要喜知 | " |
| 16 弓道部 | 36 | 医4 | 岩本 英孝 | 吉田 逸朗 | " | 38 HMS~総合格闘技同好会~ | 26 | 医5 | 岡田 耕平 | 小川 勝洋 | " |
| 17 ワンダーフォーゲル部 | 9 | 医5 | 安田 耕一 | 山内 一也 | " | 39 ヨサコイ研究会 | 18 | 医3 | 梶谷 将偉 | 林 要喜知 | " |
| 18 大東流合気道部 | 17 | 医4 | 後藤 祐也 | 林 要喜知 | " | 40 ボーリング同好会 | 28 | 医5 | 佐藤 泰征 | 廣岡 憲造 | " |
| 19 ソフトテニス部 | 61 | 医4 | 高林 宏輔 | 石川 睦男 | " | 41 ツーリング同好会 | 13 | 医2 | 八島 萌美 | 小川 勝洋 | " |
| 20 水泳部 | 44 | 医3 | 山本 浩之 | 石川 睦男 | " | 42 ばすけ同好会 | 25 | 医3 | 水上 泰 | 林 要喜知 | 新規 |
| 21 基礎スキー部"SNOW INJECTION" | 44 | 医5 | 佃 幸恵 | 油野 民雄 | " | 42団体 | 1037 | | | | |
| 22 サイクリングクラブ"ちゃりんご"の会 | 14 | 医2 | 黒木 泉 | 山崎 浩 | " | | | | | | |

【文化系】

(平成14年4月現在)

| 団体名 | 会員数 | 責任者 | | 顧問教官 | 備考 | 団体名 | 会員数 | 責任者 | | 顧問教官 | 備考 |
|---------------------|-----|-----|-------|-------|----|-----------------------------------|-----|-----|-------|-------|----|
| | | 学年 | 氏名 | | | | | 学年 | 氏名 | | |
| 1 写真部 | 9 | 医3 | 塩田 義彰 | 谷本 光徳 | 継続 | 18 温泉研究会 | 28 | 医5 | 吉田陽一郎 | 谷口 成実 | 継続 |
| 2 E.S.S | 8 | 医3 | 小泉 明希 | 内藤 永 | " | 19 華道部 | 14 | 医3 | 服部 素子 | 中村 正雄 | " |
| 3 医療研究会 | 9 | 医3 | 花香 真宣 | 宮本 和俊 | " | 20 園芸療法研究会 | 35 | 医5 | 三浦 巧 | 安川 緑 | " |
| 4 茶道部 | 25 | 医3 | 山口 卓 | 坂本 尚志 | " | 21 AMC ² (エイムシー スクウェア) | 8 | 医2 | 小田 彩乃 | 橋本 眞明 | " |
| 5 将棋部 | 18 | 医3 | 荒井 義和 | 上口勇次郎 | " | 22 蟲の会 | 6 | 医5 | 平林 耕一 | 伊藤 亮 | " |
| 6 JAZZ研究会 | 11 | 医4 | 高見麻衣子 | 佐賀 祐司 | " | 23 熱帯医学研究会 | 12 | 医3 | 久保 寛 | 伊藤 亮 | " |
| 7 ギター部 | 16 | 医6 | 齋藤 司 | 林 要喜知 | " | 24 文芸サークル~ぶんぶん | 5 | 医5 | 遠藤 尚宏 | 近藤 均 | " |
| 8 ロック研究会 | 36 | 医4 | 仁田原康利 | 伊藤 博史 | " | 25 モルツの会 | 26 | 医4 | 佐藤 陽子 | 平 義樹 | " |
| 9 聖書研究会 | 8 | 医3 | 花香 真宣 | 内藤 永 | " | 26 音楽部 | 12 | 医5 | 宇佐見和哉 | 平 義樹 | " |
| 10 プラスアンサンブル | 8 | 看2 | 前田 忠 | 北 進一 | " | 27 対話者塾 | 5 | 医5 | 木谷 方克 | 近藤 均 | " |
| 11 室内合奏団 | 30 | 医4 | 井川 貴行 | 北 進一 | " | 28 囲碁将棋練成会 | 7 | 医1 | 板谷 利 | 池上 将永 | 新規 |
| 12 旅芸人倶楽部 | 27 | 医3 | 沢本 徹 | 原渕 保明 | " | 29 かるた会 | 10 | 医2 | 田原 大地 | 松岡 悦子 | " |
| 13 合唱部 | 44 | 医3 | 齋藤 憲 | 小川 勝洋 | " | 30 国際保健医療研究会 | 7 | 医3 | 高田 幸子 | 吉田 貴彦 | " |
| 14 旅と鉄道研究会 | 10 | 医3 | 市来 一彦 | 平 義樹 | " | 31 シネマ同好会 | 16 | 医2 | 師尾 典子 | 渡部 剛 | " |
| 15 美術部 | 9 | 看3 | 高石亜希子 | 大日向 浩 | " | 32 手話サークル"Sign" | 25 | 医3 | 野田 剛 | 内藤 永 | " |
| 16 A.V.A(ボランティア同好会) | 22 | 医3 | 折本 亮介 | 平 義樹 | " | 33 盆栽部 | 28 | 医4 | 野村 好紀 | 布村 明彦 | " |
| 17 ビリヤード研究会 | 21 | 医3 | 高木 清考 | 上口勇次郎 | " | 33団体 | 555 | | | | |

研究室紹介

放射線科 助手 山田 有 則

当講座は昭和51年初代天羽一夫教授のもとに発足し、平成5年に油野民雄教授が金沢大学より二代教授として着任し現在に至ります。

大学及び附属病院の施設拡充、各種画像診断の発達に伴って、超音波、CT、MRI、血管造影を組み入れた総合画像診断を中心とした画像診断部門、放射線照射を主体とし化学療法を組合せた腫瘍治療部門及び各種臓器の機能診断を中心とした核医学部門の3本の柱で構成されています。高橋助教授を中心とする画像診断部門は、現在最新鋭のCT、MRIおよび血管造影装置への切り替え中であり、さらにクリアーな画像情報をより早く提供できるものと思われます。また、遠隔医療センター開設に伴い画像診断医のいない釧路、根室地方などの病院との遠隔画像診断にも積極的に取り組んでいます。吉田講師を中心とする腫瘍治療部門は、術中放射線照射装置

が平成9年から稼動し、脳転移病巣に対するstereotactic radiosurgeryなど先端医療に積極的に取り組んでいます。油野教授と秀毛講師を中心とする核医学部門では、心機能、肝予備能や脳血流評価など各種臓器の機能的診断を中心に取り組んでいます。平成13年の新病棟開設とともにヨード治療専用ベットが放射線科病棟に開設され、甲状腺癌およびパセドウ病の治療にも積極的に取り組んでいます。

新入局員は、各部門を1年半でローテーションする他、6ヶ月から12ヶ月の他科研修を希望に応じて受けることが可能であり、幅広い医学的知識が身に付くよう育成しています。また、初期研修終了後、希望する専門分野での国内留学に送り出し、広い視野を身に付けてもらうようにしています。北日本における放射線科専門医はまだ少なく、北海道のみならず関東地方からの派遣要請も多数ありますので、放射線医学に興味のある学生の入局をお待ちしています。



新入生研修実施される

平成14年度看護学科の新入生研修が4月15日(月)・16日(火)に、医学科の新入生研修が4月22日(月)・23日(火)の1泊2日で、共に美瑛町の大雪山白金観光ホテルにおいて実施されました。

医学科、看護学科共通で「最近のHIV感染症/エイズ事情とその理解」、「若者を狙う悪質商法」、「アルコールとの正しいつきあい方」、「大学生のための心理学」等の講義がスライドやビデオを使用して、わかりやすく行われました。

看護学科では、班別討議や看護学科の先輩からのメッセージがあり、質疑応答が行われました。

医学科では、ベテラン医師となった先輩からのメッセージの後、救急蘇生法の実習が行われました。倒れている人に声をかけ、周りの人を呼ぶところから始められました。大きな声が出づらい人や、迫真の熱演(?)があったりでしたが、人の命を救うという貴重な訓練を経験していました。

(学生課)



平成13年度 学位記授与式

平成13年度学位記授与式が、3月25日(月)10時30分から本学体育館において挙行されました。

式では、本学室内合奏団が奏でる調べのなか、卒業生164名(医学科97名、看護学科67名)に学士学位記が、博士修了者12名に博士学位記が、修士修了者2名に修士学位記が一人ひとりに手渡されました。

ついで学長から卒業にあたり、式辞が述べられました。

(学生課)



平成14年度 入学式

医学科・看護学科の入学式が、4月5日(金)10時から本学体育館において挙行されました。

式では、新入生155名(医学科95名、看護学科60名・看護学科第3年次編入生10名)を代表して医学科 青山藍子さんが宣誓を行い、医学生・看護学生としての自覚を新たに大学生活の第一歩を踏み出しました。

(学生課)



表紙写真の募集

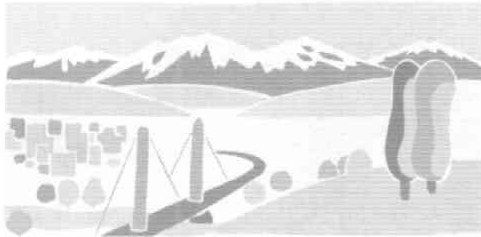
写真の得意な方、写真の好きな方、写真に興味のある方、あなたの写真で「かぐらおか」の表紙を飾りましょう。

皆さんの応募を、心よりお待ちしております。

採用の方には、謝礼をさしあげます。

申し込み、問い合わせは学生課専門職員 細木まで。

(広報誌編集委員会)



教官の異動

| | | | | |
|----|----------|----------|-----|-------|
| 昇任 | H14.4.1 | 整形外科 | 助教授 | 伊藤 浩 |
| " | " | 小児科 | 講師 | 伊藤 善也 |
| " | " | 産科婦人科 | 講師 | 山下 剛 |
| " | " | " | 講師 | 藤井 哲哉 |
| 採用 | " | 病理学第二 | 教授 | 立野 正敏 |
| " | " | 麻酔科蘇生科 | 講師 | 藤田 智 |
| 退職 | H14.3.31 | 生化学第一 | 教授 | 藤澤 仁 |
| 辞職 | " | 数理工学 | 助教授 | 三田村 保 |
| " | " | 小児科 | 講師 | 宮本 晶恵 |
| " | " | 整形外科 | 講師 | 後藤 英司 |
| " | " | 産科婦人科 | 講師 | 林 博章 |
| " | " | 輸血部 | 講師 | 山本 哲 |
| 昇任 | H14.5.1 | 附属動物実験施設 | 助教授 | 中谷 和宏 |
| " | " | 眼科 | 講師 | 石子 智士 |



窓 外

解剖学第二講座 教授

渡 部 剛

出席票に関する私見

2000年の秋に旭川医大に着任して、すぐに1年次対象の組織学の講義・実習を担当したが、当初、非常に違和感を覚えたのは毎時間講義の度に個々の学生に出席票を配ることだった。私たち教官は、出席などとななくても自然と学生が集まるような良い講義をめざさなければならないと思う。特に医学部の講義は、ほぼすべてが必修科目で学生側にはほとんど選択の余地がない。そのような状況でつまらない講義に出席を強要するのは、青春時代の貴重な時間の浪費を強いるようで、正直なところ、こちらも心が痛む。

解剖学という学問は、伝統的に実習重視である。前号の「窓外」で解剖学第一講座の吉田教授が書

かれていたように、解剖学教育の本質は、学生ひとりひとりが頭の中に自分なりの人体構造・機能のイメージを作ることだと思う。そのように考えると、吉田先生や私の頭の中味を学生の頭に直接コピー&ペーストする方法がない以上、解剖学では、実際に解剖したり顕微鏡をのぞいたりして、各学生自身が生体の構築原理を実感 (realize) する必要がある。その際に、講義というのは実物を理解するための補助手段のひとつに過ぎない。実習で各自が納得いくまで肉眼解剖や顕微鏡観察を行ってくれさえすれば、講義に出る必要はなく、知識の取得は自学自習で済ませてもらってかまわない。

このように書くと解剖学の講義など要らないではないかという声が聞こえてきそうだが、実はそうではない。こちらはこちらで、教科書で自学自習するよりも、私の講義を聴くほうが、重要なポイントをより効率的に理解できるぞと心の中で密かに思っているのである。そのような意地を心に秘めて、私たちは日々、講義・実習の改善や工夫を続けている。ちなみに、昨年度から、講義で出席をとるのをやめたが、それでも7割以上の学生が出席してくれており、旭川医大のまじめな学生諸君には感謝している。